先生紹介

文学部長 高久健二教授

生田１号館考古学実習室にて。背後には発掘した土器などが並ぶ

たかく　けんじ

1967年茨城県生まれ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。韓国・東亜大学校大学院史学科博士課程修了・学位取得（文学博士）。埼玉大学教養学部講師・准教授を経て、2010年専修大学文学部教授。主要著書は『楽浪古墳文化研究』（学研文化社、1995年）、主要論文は「楽浪郡・三韓・倭の交易と社会変化」（2022年）、「新羅積石木槨墓の埋葬プロセス」（2018年）、「楽浪彩篋塚（南井里116号墳）の埋葬プロセス」（1999年）、「楽浪墳墓の編年」（1993年）など。

実践教育と留学から学んだこと

9月に文学部長を拝命いたしました歴史学科の髙久健二と申します。文学部は6学科から構成され、学生数約3,000名（大学院を含む）を有する大型学部であり、多種多様な専門分野をもつ教員約80名が教育・研究にたずさわっています。私の専門は考古学であり、とくに朝鮮半島を中心とした東アジア考古学を研究しています。

シルクロードに憧れて瑞穂の国へ

私は茨城の田舎で生まれ育ち、中学・高校の頃から周りにたくさんあった遺跡をめぐるのが好きで、しだいに考古学に興味をもつようになりました。また、当時はNHKで「シルクロード」の特集が放映されており、中国大陸の考古学にも関心をもつようになりました。日本の大学では考古学専攻は文学部に設置されていることを知り、それまで小説などほとんど読んだことのなかった私は、やや違和感をもちつつも、迷うことなく理系コースから文系コースへと変更しました。今でこそ考古学という学問分野は、それなりに世間で認知されていますが、当時はまだ「宝物探し」のように思われていました。まだ「～オタク」という言葉もなかった時代なので、周囲からは単に奇異な高校生として見られていたかもしれません。両親は私が文学部に進学し、考古学を専攻することについて必ずしも賛成はしていませんでしたが、反対を押し切って少しでも大陸に近い福岡の大学の文学部に進学することにしました。

文学部考古学専攻に進学してからは、誰にも気をつかうことなく思う存分、考古学を学ぶことができるようになった喜びでいっぱいでした。文学部は必修科目が少なく、カリキュラムの自由度が高かったため、関心のある授業で時間割を組むことができ、私のような学生には天国のようでした。夏休みと春休みには長期間にわたって遺跡の発掘調査に参加することができ、さらに考古学の面白さにのめり込んでいきました。学期が始まっても発掘現場から離れなかったため、研究室の助手から「いいかげん大学に戻ってこい」と叱られるほどでした。発掘調査を通じて考古学の技術はもちろんのこと、実に多くのことを学ぶことができました。今でも仕事や研究に行き詰った時には、初心に帰って当時のことを思い出すようにしています。

学部2年生の時に外務省の交流事業で韓国に1週間行く機会がありました。初めての海外旅行であり、期待

↑発掘調査実習の様子（2017 年、高崎市漆山古墳）

と不安感でドキドキしていたことを思い出します。オリンピックを翌年に控えたソウルの街は活気に満ち溢れており、アジアンパワーに初めて触れることができました。また、新羅の古都慶州では都城や王陵群を見学することができ、その素晴らしさに魅了された私は、その後、朝鮮半島の考古学に関心を持つようになり、韓国語の勉強に没頭するようになりました。しかし、当時は韓国語（コリア語）の授業を開講している大学は少なく、辞書も日本のオリジナルのものはほとんどなく、韓国で出版されているものを外函を変えて販売しているほどでした。それでも福岡は韓国とわずか 200km しか離れていないため、日中でも韓国の中波のラジオ放送が入るので、暇さえあれば意味も分からないまま聞いていました。YouTube はもちろんのことインターネットさえもなかった時代のことです。

大学卒業後は迷わず大学院に進学し、さらに研究を続けることにしました。当時はバブル全盛期であり、就職せずに進学を選択するのは一般的には変人と思われても仕方なかった時代です。大学院では本格的に朝鮮半島の考古学を研究することにしましたが、合わせて中国考古学について学ぶ機会にも恵まれました。大学院の授業を通じて、考古資料を解釈するには、歴史学はもちろんのこと、人類学、哲学、社会学、そして自然科学的思考までもが不可欠であり、幅広い教養を身につけることが重要であることを学びました。

玄界灘を渡って韓（から）の国へ

修士課程修了後は、専門のフィールドである韓国の大学院博士課程への進学を希望し、南部の港町である釜山（プサン）にある私立大学に合格することができました。憧れの韓国に留学できた喜びとは裏腹に、最初はなかなか会話が上達せず苦労したことを覚えています。韓国語にはそれなりの自信があったのですが、釜山の方言はまったく聞き取ることができず、大きなショックを受けました。しかし、大学の仲間たちと発掘調査現場で長期間共同生活するなかで、自然とコミュニケーション能力が養われ、会話もできるようになりました。２年目からは大学の講義も担当するようになり、貴重な教育経験も得ることができました。

この釜山で人生の師と出会うことができました。私の指導教授は韓国の青銅器時代が専門で、大学の ROTC（予備役将校訓練課程）のご出身ということもあり、立派な体格で、圧倒的な存在感のある方です。数年前に学生と一緒に先生を訪ねる機会がありましたが、そのときの先生の印象を学生に聞いたところ、まるでアニメのキングダムに出てくる「王騎将軍」のようだといっていました。先生からは研究はもちろんのこと、日本人留学生としての振舞い方に至るまで、厳しくも懇切丁寧に指導していただきました。何よりも先生の大学や学界における姿勢をみることによって、研究・教育を担うことの意味や責任を理解できたことは大きな収穫でした。３年半の留学生活を終え、帰国した後は、埼玉大学を経て、2010 年４月に専修大学に赴任し、今年で 15 年目を迎えます。

文学部における実践教育

本学の文学部では、学生に専門的なスキルを身につけてもらうために、様々な実践的な科目を開講しています。例えば歴史学科では、実際の遺跡を発掘調査する「考古学実習」という科目を設置しています。例年、８月後半から９月前半の３週間にわたって、教員と学生が合宿しながら発掘調査をおこなっています。発掘調査はよく手術になぞられることがあり、最小限の発掘で最大限の成果を得る必要があります。事前にどのような発掘法が適切かを充分に議論し、発掘しながらも刻々と変わる状況に対応していかなければなりません。また、発掘調査は一人ではできないので、教員と学生が一体となって、チーム全員で協力し合いながら進めていく必要もあります。遺跡は一度発掘してしまうと、もう二度と元には戻せない、一回勝負の緊張感の中で進める発掘実習は究極のアクティブラーニングといえるでしょう。学生たちは発掘調査実習を通じて、専門的な技術を身につけるとともに、社会生活で必要なコミュニケーション能力も養われていきます。

大学の教育では、キャンパス内での授業とともに、学外等でおこなう実践的な教育も重要であり、学生には積極的に参加するように勧めています。また、国際交流センターでは在学中に海外の交流協定校に留学できる様々なプログラムが準備されており、文学部の多くの学生が利用しています。私は学生たちの自主性を尊重し、積極性にかけてみたいと思います。保護者の皆様には、これら本学における教育の特色をご理解いただいたうえで、今後とも引き続きご支援をいただければ幸いです。